

カンボジアの若者にとって アンコール・ワットとは

ケオ・キナル

上智大学アンコール研修所元研修生
東京芸術大学大学院生

20世紀末に起きたカンボジアでの出来事は、カンボジア社会に多大な打撃を与え、世代の断絶という深刻な問題に直面させた。したがって、70年から79年の間に生まれたカンボジア人は、家庭や学校などの十分な教育を受けられず、道徳を重視する伝統的なクメール社会の一員として果たすことができないままになっている。今、若者となった彼らはカンボジアという大家族を安定させ、近代的に発展させなければならない立場にある。しかしながら、世代の断絶は、道徳をはじめ、民族の魂、国を思う心、団結する精神をなくさせ、カンボジア社会に貧弱さやもろさを導いた結果となってしまった。

このような精神面の欠落を食い止めるために、カンボジアの若者たちに自国の文化を理解させ、国家の誇りをもたせる必要がある。これは、アンコール遺跡を中心とする文化遺産への理解、その文化遺産を愛し、次の世代に継承させる気持ちを育つほかにない。はたして、「アンコールとは、文化遺産とはどういう意味をもつか」から始まらなければならないのである。

カンボジアには、祖先が残した多数の遺跡が全国に点在している。これらの遺跡は、6世紀からのもものが中心であり、レンガや砂岩もしくはラテライトで華麗に建造され、カンボジアの名声の世界に博している。海外では、カンボジアについて話されるとき、アンコール・ワットを話題とすることが多く、カンボジア国よりもアンコール・ワットを知っている人が多いようである。

カンボジア国民の一部は、自分がアンコールの人々の血を引いていると自称していながら、いまだにアンコール遺跡を訪れることがなく、アンコールはどんなものかを知らず、アンコールはどこにあるのかさえ知らない。一方、カンボジア人の大部分は、アンコール朝の偉大な国王であるジャヤヴァルマン七世をよく知っているものの、アンコール・ワットはこの王の作品だと勘違いしていた人もいる。確かにアンコール・ワットは有名な遺跡でカンボジアの国旗にその姿を取り入れ、国歌にもその偉大さを称えるのであるが。

アンコールの歴史はカンボジアの全史をカバーするものではないが、8世紀から14世紀までのカンボジアの輝かしい時代の歴史である。そして、アンコールはクメールの古都でもあり、当時はヤソタラプラと呼ばれていた。ヤソタラプラには多くの遺跡が密集し、特にアンコール・トーチュ（小アンコール）とアンコール・トム（大アンコール）が有名である。

アンコール・トムは周囲12kmの城壁の中にある遺跡郡を指している。城壁の中央に飾るのはバイヨン遺跡である。第一次アンコール王都はプノン・バケンを中心としていたが、登位する王によつ

て王都の位置が少しずつ変更され、そしてアンコール・トムはそのアンコール朝の最後の王都であった。

アンコール・トーチュは東西1000m、南北800mの城壁をもつアンコール・ワットを指している。アンコール・ワットは景観といい、技術といい、上質の砂岩で建造された壮大な遺跡である。アンコール・ワットはソリヤヴァルマン二世（在位1113-1150）によって建設され、当時のカンボジア国家の権力を示したが、現在ではクメール民族のアイデンティティの象徴となっている。一方、あまりにも素晴らしいため、アンコール・ワットは人間の作品ではなく、建築神であるビスヌカの神業であると多くのカンボジア人は信じている。彼らはアンコール・ワットを観るとき、自分の足が中に浮いているかのように感じ、ここに来られるのも神の導きと考え、まったくの偶然性だと思っている。なぜならば、偉大な祖先の遺跡にいくら来ようと考えても、神の力がなければ実現できないと彼らは信じているからである。

現在では、アンコール・トムとアンコール・トーチュをあわせてアンコール遺跡と呼ばれるようになった。アンコールには時代によって、在位する王によって様々な様式の遺跡が存在している。また、アンコールにあるこれらの遺跡をアンコール遺跡群と呼ばれ、国の文化財とされた。一方、これらの遺跡群がユネスコの世界遺産条約リストに登録され、世界文化遺産に指定された。

上記のように、アンコール、すなわちアンコール・トム、アンコール・ワットはカンボジアの祖先の知恵の結晶であり、勤勉と忍耐と団結を表わし、クメールの魂を象徴するものである。後世代に継承するために我々はこれらの遺跡を守り通さなければならないと痛感している。

